

Beth Baron, Egypt as a Woman : Nationalism, Gender, and Politics

著者	岩崎 えり奈
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	48
号	11
ページ	86-89
発行年	2007-11
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007309

Beth Baron,

*Egypt as a Woman :
Nationalism, Gender, and
Politics.*

Berkeley : University of California Press,
2005, xv+287pp.

いわ さき えり な
岩 崎 えり 奈

はじめに

中東地域研究者にとって両大戦間期は魅力的な時代である。この時代は、反植民地・独立運動とともに自由主義、世俗主義、イスラーム主義などの様々な思想や運動が高揚し、社会的には、人口増加と都市化の急速な進展、知識人をはじめとした都市中間層の台頭などの大きな変化がみられた時代であった。そうした社会・政治状況のなか、ジャーナリズムの活況にささえられて、誰が「国民」であるのか、「国家」にとっての政治・社会・経済的な目標は何であるのかといった論争が盛んに繰り広げられた。

本書は、この両大戦間期に焦点をあて、エジプトのナショナリズムとジェンダーについて明らかにすることを試みた歴史研究である。この時期、女性は政治の場から排除されていた一方で、『女性としてのエジプト』という本書の表題にあるようにナショナリズムのシンボルとして表象された。本書は、この女性のシンボル化と政治的排除とが並存する状況を「逆説」として捉える。そして、「逆説」が生じた両大戦間期の時代状況を明らかにするため、19世紀から1919年革命を経た後の1940年代までのナショナリズムにジェンダーが与えた影響を雑誌や新聞、写真などの資料でもって検証する。

著者のベス・バロンはニューヨーク市立大学で歴史学の教授として教鞭をとる、アメリカの代表的な中東・ジェンダー史研究者の1人である。これまで

に刊行された著作には、Baron (1994) などがある。

以下、本書の概要を明らかにしたあと、若干の評価を試みる。

I 本書の構成・内容

本書は、序論、第1部と第2部、結論から構成される。

序 論

第1部 ネイションのイメージ

第1章 奴隷、エスニシティ、そして家族

第2章 エジプト的な名譽の構築

第3章 ナショナリストのイコノグラフィー

第4章 写真と報道

第2部 女性ナショナリストたちのポリティクス

第5章 「婦人たちのデモ」

第6章 エジプト人の母

第7章 ワフド党のパルチザン

第8章 イスラーム活動家の道

結 論

序論は、彫刻家マフムード・ムフタルが1919年革命にインスピレーションを得て1928年に作成した「エジプトの目覚め」と題された女性像（スフィンクスに片手をおき、もう片方の手でヴェールを取り払おうとしている農民女性の像）にまつわるエピソードから始まる。近代国家を象徴するこの女性像が完成した際には、国家行事として盛大な記念式典が催された。しかし、当時、女性ナショナリストたちが実際に存在し活躍していたにもかかわらず参列者に女性の姿はなかったという。

このエピソードに示されるナショナリズムと女性の「逆説」的な状況については、従来の研究でも論じられている。しかし、著者は、女性のシンボル化を単に西洋の模倣あるいは西洋に対する反発とみる従来の見方は不十分であると指摘する。なぜなら、女性のシンボル化は、植民地支配の有無にかかわらず、ナショナリズム運動に普遍的にみられた現象だからである。他方、ナショナリズムにおける女性の劣位を女性の政治的受動性として捉える見方も、政

治的な優先課題の問題とする運動論的な見方も、政治の場がジェンダー化されていることを看過していると批判する。そして、女性のシンボル性についてはエジプト社会の歴史的文脈のなかで、ナショナリズムとフェミニズム運動の関係性については女性の政治文化という文脈のなかで解釈する必要性を説く。

第1部は、ネイションのイメージ形成と、それがいかにジェンダー化されたものであるかを考察する。

第1章と第2章は、家族と女性に関するナショナリストの言説が形成された社会・政治的な背景を論じている。まず、第1章では、社会・政治的な背景として、奴隷制廃止を契機としたトルコ・チュルコス系特権階層におけるハウスホールドの変容と「エジプト化」が指摘される。著者によると、19世紀まで、特権階層のハウスホールドは複雑なエスニシティ構成の大所帯で、チュルコス系の女性奴隷とハーレム制度を特徴としていたという。19世紀後半における奴隷制の廃止は、そうしたハウスホールドの存続を困難にした。その結果、夫婦関係と愛情に基づくブルジョワ的な家族の形成と、ローカルな女性との婚姻を通じた特権階層の「エジプト化」が進み、言説の面では、理想とすべき家族と「女性問題」に関する論争がおきた。

第2章では、メディアや詩、演説などを通して、ナショナリストたちが女性の純潔さと密接に結びついた家族の名誉を国家の名誉という言説のなかに取り込み、広めていった過程が明らかにされる。それは、植民地支配下の女性に対する性的暴力が国家に対する侮辱として言説化されていく一方で、女性ナショナリストが唱える社会的地位に基づく名誉観の排除の過程として描かれる。

第3章と第4章では、ナショナリストたちが様々な社会グループをネイションに統合するために用いた視覚的な材料が取り上げられる。第3章では、絵画や記念碑、風刺画、郵便切手の分析が行われ、ネイションを表象する女性像が社会構成の多様性を反映して様々でありつつも、農民女性というイメージからブルジョワ的な「新しい女性」へと変化したことが明らかにされる。第4章では、写真、とりわけ新聞や雑誌の写真的分析がなされる。そして、写真

がネイションの具体的なイメージを普及する重要な役割を果たしていたこと、女性ナショナリストも女性や母というシンボルをアピールし、写真を自らの政治活動に活用していたことが指摘される。

第2部は、女性ナショナリストのポリティクスについてである。

まず、第5章では、公的な場での女性による初めての政治的な示威行動とされる1919年革命時の「婦人たちのデモ」について考察がなされる。そして、本来は上流階層の女性たちに限定されたこの反英デモが、後にリベラル、イスラーム主義者、フェミニストたちによってそれぞれの立場から読み替えられたことが、写真などの視覚資料の分析を通して明らかにされる。

続く第6章では、この時代において最も影響力のあった女性、(エジプト民族主義の指導者サアド・ザグルールの妻) サフィーア・ザグルールの生涯に焦点が当てられる。そして、「エジプトの母」としての役割を戦略的に演じることで彼女が政治に参加したことが検証される。

第7章はワフド党女性部で活躍したホダー・シャアラウィーなど4人の女性政治活動家を、最後の第8章ではイスラーム主義の立場からマスメディアで活発に発言し政治活動を行ったラビーバ・アハメドを取り上げている。シャアラウィー以外の女性は、今日あまり知られていない女性活動家たちである。著者は、彼女たちの生涯を丹念に追い、女性がシンボル化すればするほど性別役割が固定化されるというジレンマに直面しつつも、男性中心の政治の場の内と外で積極的に政治活動を行っていた事実を明らかにする。

結論では、本書のテーマであるネイションのイメージと女性ナショナリストのポリティクスの関係について、第1部と第2部の総括がなされる。そして、ナショナリズム運動は女性の政治参加の場を広げ、女性を動員する一方で、役割を限定し排除したと批判的に述べて締めくくられる。

II 本書の特色と貢献

近年、中東のナショナリズムとジェンダーに関する歴史研究が数多く発表されている。ことにエジプトに関しては、エジプトの女性運動が古くから活発になされ、当時のジャーナリズムの活況のおかげで雑誌などの文献史料が豊富に残されていることなどから、多くの研究がある[代表的な研究として、アハメド 2000: Abu-Lughod 1998: Badran 1995: Pollard 2005]。しかし、研究の多くは女性をめぐる論争をテーマとした言説の研究である。例えば、アハメド(2000)では、ヴェールに代表される女性に関する言説の構築過程が植民地支配と抵抗、西洋近代対伝統といった二分法的な論争の展開として考察されている。

これに対して、本書は、女性に関する論争を同じく主題としつつも、エジプト社会がおかれた歴史的な文脈に位置付けて論じようとしている。両大戦間期のエジプト社会は、特権階層におけるハウスホールドと女性の行動様式の変化、トルコ系特権階層と土着の新たな中間層との対立関係、ジャーナリズムの発達といった社会・政治的な変化がみられた時代であった。そうした時代状況であったので、ネイションの象徴としての女性像は単なる西洋の輸入物ではなく当時の複雑な社会階層を反映して多様であり、女性の結婚やライフスタイルをめぐる様々な考え方があった。本書は、視覚資料の分析によってこのことを鮮やかに提示している。

第2の特色は、歴史に名を残さなかった女性活動家に目を向けていることである。むろん、記録に残されていない出来事や人物の歴史を掘り起こすことで「正史」を相対化する手法はジェンダー史の特徴のひとつであり、これまでのエジプトのジェンダー研究でも用いられてきた。しかしながら、ナショナリズムとジェンダーに関するかぎり、研究の対象として取り上げられる人物は強烈な個性をもち、公的な政治の場で活躍した女性か、劇的な生涯をおくった女性である。例えば、「エジプト・フェミニスト連合」の創設者でエジプトの女性運動を主導したホ

ダー・シャアラウイー、西洋スタイルのフェミニズムを追求し、現実と理想の乖離に苦悩したドリーア・シャウフィークなどである[アハメド 2000: Badran 1995: Nelson 1996]。

これに対して、著者は、歴史の闇に葬り去られた「穏健な」女性活動家に注目する。彼女たちは、独立と女性の権利のために主体的に行動したが、「良妻賢母」、「家庭性」というジェンダー規範を遵守あるいは戦略的に操作しつつ、社会福祉や教育などの分野で活動し、男性中心的な公の政治の場では目立たなかった女性たちである。なかでも興味深いのは、最後の章で叙述されるラビーバ・アハメドであろう。彼女は、世俗主義的でリベラルな女性活動家たちと独立のために行動をとともにしたが、イスラーム主義的な信念をもちムスリム同胞団にもかかわった。彼女の経歴は、当時のイスラーム主義が近代的な国家建設という政治的プログラムと対抗関係にあったのではなく、それを追求する思想・運動であったことを物語っている。

III 本書に対する疑問点

上述の内容理解と評価に基づき、いくつかの疑問を指摘しておこう。

第1に気になったのは、奴隷制の廃止に関する記述である。著者は、ナショナリストがブルジョワ的な家族像を理想とした社会的な背景として、彼らの属する特権階層におけるハウスホールドの変容を主張し、その契機として奴隷制の廃止の影響を論じている。奴隷制廃止の影響という論点は興味深い問題であり、結論でも本書の独自性のひとつとして述べられている。しかし、著者自身が指摘しているように、トルコ系の女性奴隷はアフリカ系の奴隷と社会的な立場や役割が異なり、奴隷制廃止の影響を受けたとは単純に判断できない。また、もし奴隷制廃止の影響があったとしても、奴隷は中間層のハウスホールドにおいても重要な構成要員であったかみならず、特権階層のハウスホールドのみが変容を余儀なくされたとは考えられないだろう。このような細部に対する考慮抜きに、奴隷制の廃止をハウスホールド

ドの変容、家族像の議論に結びつけるのは安易すぎる。

第2は、本書の研究対象が上流階層の女性に限られていることである。本書のテーマであるナショナリズムとジェンダーが社会階層の問題と絡んでいることは明白である。しかし、本書では、研究対象が上流階層に限定されており、階層性問題はまったく論じられていない。史料上の制約があるのであれば致し方ないが、特権階層と対抗関係にあった新中間層のナショナリストと女性も分析の対象に加えていたならば、本書の特色である歴史的な文脈と言説の関連性についてより深い議論ができたと思われる残念である。

最後に、著者は、テキストや視覚史料をナショナリズムの言説として読み込みすぎる嫌いがある。たしかに、当時の女性の生活や表象を理解する上でナショナリズムは重要なテーマである。しかし、ナショナリズムの言説に関連づけて女性の主体性を議論しなくとも、教育や保健衛生、環境あるいは人種やマイノリティ、階層、貧困の問題など、女性のおかれた歴史的状況を理解するために解き明かさねばならない問題群はいくらでもある。そうした問題群に取り組むことは、本書のテーマであるナショナリズムとジェンダーについてさらに理解を深めることにつながるだろう。

ほかにも、社会福祉や教育の分野における女性ナショナリストの貢献についての考察が不十分なことや、一次資料の取り扱い方やハウスホールドなどの言葉の用い方が厳密さを欠くことなど、実証研究の立場からすれば不満な点は多々ある。とはいえ、本書は視覚史料の用い方やアメリカの中東・ジェンダー史の動向について多くの示唆を与えてくれる歴史研究書であり、一読をお薦めしたい。

文献リスト

<日本語文献>

アハメド、ライラ 2000. 『イスラームにおける女性とジェンダー——近代論争の歴史的根源——』(林正雄・岡真理・本合陽・熊谷滋子・森野和弥訳) 法政大学出版社.

<英語文献>

- Abu-Lughod, Lila ed. 1998. *Remaking Women: Feminism and Modernity in the Middle East*. Princeton, N. J.: Princeton University Press.
- Badran, Margot 1995. *Feminism, Islam and Nation: Gender and the Making of Modern Egypt*. Princeton, N. J.: Princeton University Press.
- Baron, Beth 1994. *The Women's Awakening in Egypt: Culture, Society, and the Press*. New Haven: Yale University Press.
- Goldschmidt, Arthur, Amy J. Johnson and Barak A. Salmoni 2005. *Re-Envisioning Egypt, 1919-1952*. Cairo: American University in Cairo Press.
- Jankowski, James and Israel Gershoni eds. 1997. *Rethinking Nationalism in the Arab Middle East*. New York: Columbia University Press.
- Nelson, Cynthia 1996. *Doria Shafik, Egyptian Feminist? : A Woman Apart*. Gainesville: University Press of Florida.
- Pollard, Lisa 2005. *Nurturing the Nation: The Family Politics of Modernizing, Colonizing, and Liberating Egypt, 1805-1923*. Berkeley: University of California Press.

(一橋大学大学院経済学研究科特任講師)